

第31号

平成27年3月発行

地域の人がつくる

地域情報誌

赤坂

青山

AKASAKA

AOYAMA

MYタウン

赤坂・青山流

特集

おもてなし

赤坂警察署からのお知らせ

車上ねらいにご注意ください!

～被害にあわないために～

●車から離れるときは、「ドアロック」を確実に!

自動販売機や店舗などにちょっと立ち寄るときも、必ずドアロックをしてください。

●車内にバッグなどを放置しない!

現金、貴重品、バッグなどを車内に置いたまま車から離れないようにしてください。

ドアロックをしていても、車外から小銭やバッグなどが見えると、車上ねらいのターゲットになります。

●警報ブザーの活用を!

窓ガラスの破損や衝撃、不正なドアの開閉に反応する警報ブザーを設置すると効果があります。また、車外から見るとそこに「警報装置設置」などのステッカーを貼っておくのもひとつの方策です。

●お問い合わせ／赤坂警察署

電話 03-3475-0110 (内線2612)

赤坂消防署からのお知らせ

あなたも自分の街を守りませんか?

赤坂消防団員募集!

私たちの住む東京は、首都直下型地震やゲリラ豪雨など、多くの危険にさらされています。地域防災の要となって地域の皆さんとのふれあいを大切にした活動をする消防団は、ますます重要な存在となっています。

赤坂消防団においては現在108名の消防団員が所属しており、平常時の任務や災害時に備えた訓練に励んでいます。

地域の祭りなどでの火災予防の呼びかけや警戒活動

地域の防災力を高めるための住民への初期消火や応急救護の指導

消防団の任務

災害発生時の、消防署と連携した消火・救助活動

災害に備え、日々の消火・救助・救護訓練

赤坂消防署では、赤坂・青山地区に在住、通勤、通学されている18歳以上の健康な方を対象に団員を募集しています。我こそはという方、あるいはすこしでも興味のある方は、お気軽に赤坂消防署までお問い合わせください。

●お問い合わせ／赤坂消防署

電話 03-3478-0119

http://www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-akasaki/

病院へ行く? 救急車を呼ぶ? 急な病気やけがで迷ったら

東京版

救急受診ガイド

東京消防庁ホームページで提供中

携帯電話用

スマートフォン用

赤坂・青山

地域で活躍している方々を紹介!!

vol.5

地域の活動

港区保護司会 赤坂分区

井川 幸成 さん

港区保護司会 赤坂分区 井川 幸成さんに話を聞きました。

保護司さんは、地域でのネットワークを生かし、罪を犯した人への更生を助けるとともに、地域の犯罪予防のために、日々さまざまな活動を行っています。

■この仕事をするようになったきっかけを教えてください。

長年、サラリーマン生活をしていました。定年退職を機に、40年間住んでいる赤坂地区に、何らかの形で貢献したいと考えていました。そんな時に、現在の赤坂分区長から勧められて、保護司の仕事をお受けしました。

■この仕事にどのくらい携わっていますか?

平成21年から携わっているので、6年目になります。

■保護司の活動内容を紹介してください。

罪を犯した人に対し、面接を重ね指導・相談・支援などを行うことで、本人が更生し、社会復帰をするための手助けをする更生保護が、保護司として一番大事な仕事です。また、青少年育成保護の観点から、犯罪を未然に防ぐために地域でさまざまな活動を行っています。

■保護司の活動の中で、特に力を入れている活動は何ですか?

地域社会で犯罪を起こさせないこと、罪を犯した人が社会復帰しやすい地域社会をつくることを目的とした、「社会を明るくする運動」に力を入れています。

赤坂青山地区では、7、8月を「社会を明るくする運動」の強調月間として、地域のボランティア団体や学校の協力をいただきながら、実施しています。特に、毎年7月中旬に実施する、「社会を明るくする運動」パレードでは、約900名の人が参加をする、地域のイベントです。

■「社会を明るくする運動」パレードを実施することのやりがいや大変なことは何ですか?

「社会を明るくする運動」パレードでは、たくさんの人に参加していただいています。

実施にあたっては、当日はもとより、準備の段階で、PTAの方々、保護司の皆さんが活躍しています。その姿を見て、迷惑を掛けないよう準備しておくにはいけないので大変ですが、地域のボランティアの方々とお互いに力を合わせて実施することで、たくさんの地域の方々と知り合えることが、やりがいにつながります。

■保護司として活動するうえで、これからの目標は何ですか?

「社会を明るくする運動」パレードに、学校の保護者の方にも参加いただくことが、たいへん意義のあることと考えています。

パレードに家族で参加していただくことで、更生保護について、また、社会を明るくするためには何をしたらよいのか(罪を犯した方への配慮など)を、家族のあいだで話し合うきっかけになってほしいと考えています。

そのためには、「社会を明るくする運動」を今後も継続していき、犯罪のない地域社会づくりに取り組んでいくことが目標です。

●お問い合わせ／協働推進課 協働推進係

電話 03-5413-7272

赤坂・青山で見つけよう!

世界のこと

港区国際交流協会

「ニューイヤーパーティー2015」

今回は、北青山を拠点に活動する港区国際交流協会主催の「ニューイヤーパーティー2015」に編集委員が参加しました。

港区国際交流協会では、ボランティア活動を母体として、外国人支援や多文化社会の実現を目的としたさまざまなイベントが催されています。

ニューイヤーパーティーには、各国大使館関係者や多くのボランティアの会員が集まりました。

ご挨拶が終わると、鎌倉や富士山へのハイキングや、大使館との交流イベント、和文をテーマにしたイベントなどの1年間の活動報告がありました。

そして、いよいよアトラクションがスタート。和太鼓の迫力あるリズムに合わせて、今柄繁華さんによる創作書道のパフォーマンスで描かれた文字は「愛」と「運往生」。

その後、中島勝裕記念会による三味線の演奏に続き、アコーディオンに合わせて日本の馴染みの歌を英語で歌うコーナーがありました。

最後に、各国の景品があたる「福引」では、各国大使に加えて赤坂親善大使も順番に抽選をし、新年ならではの雰囲気を楽しみました。

ニューイヤーパーティーは、終始、国際色豊かに英語と日本語の両方で進められ、外国人の参加者も日本の文化に親しんでいました。

港区国際交流協会では、他にも多くのイベントを開催しています。詳しくは、下記までお問い合わせください。

赤坂親善大使も、各国大使と一緒に抽選しました。なんとアカサカメンも大当たり!

●お問い合わせ／一般財団法人 港区国際交流協会

〒107-0061 港区北青山1-6-3 3号棟B1

電話 03-6440-0233

ホームページ http://www.minato-intl-assn.gr.jp/

青山霊園眺望

～人と歴史～

第23回

まつた まさよし

松方正義 (1835～1924年)

1種口 第17号1側1番

私たちが現在使っているお金は、正式名称を「日本銀行券」といいます。明治維新に、日本の通貨が金・銀から、紙幣と硬貨へ変わりました。その後の経済危機から日本を救うため、日本銀行を設立したのが、松方正義というひとりの高官だったのです。

波乱の幼少期

松方正義は天保6年(1835)、薩摩藩鹿児島県の郷土松方家の四男として生まれました。松方が10歳の時、親族が藩の金を使い込み、一家は大きな負債を抱えることになります。さらに、翌年に母、2年後に父が他界し、松方はわずか13歳で両親を失ってしまったのです。16歳で藩に出仕した松方は、精勤が認められて得た褒賞でこの借金を返済し、両親の墓前に報告しました。後年「生涯でも満足感を味わった時」と語っています。

薩摩藩士から明治政府の高官へ

藩士として次第に頭角を現してきた松方は、藩主・島津忠義の後見人・島津光久の側近となり、幕末の寺田屋事件や生麦事件、薩英戦争にも深くかかわりました。

やがて明治維新となり、松方は幕府の直轄領であった日田県(現・大分県ほか)の知事に就任します。日田では、豪商から新政府への借入金を目玉に調達する一方、日本初の孤児院「日田養育院」の開設、別府の築港を推進するなど民生にも力を注ぎました。これらの功績により、明治3年(1870)に新政府の民部大丞に転任、地租改正に取り組みます。その後、租税権限に転じ、明治6年(1875)には大蔵大輔に就き、国の財政に携わることになります。

日本銀行設立と松方デフレ

西南戦争鎮圧後、ヨーロッパに赴いた松方は、フランスの大蔵大臣レオン・セイと出会います。当時の日本はアメリカの銀行制度のように各銀行が銀行券を発行していましたが、激しいインフレで経済危機に直面していました。セイはこれを、中央銀行だけが発行できるヨーロッパ方式に変えるように勧めます。松方は帰国後、明治14年(1881)には参議兼大蔵卿に就任し、国の財政を任されることになりました。翌年にはセイの助言を受け、日本銀行を創設して紙幣整理に着手しますが、デフレとなり景気が悪化したため各地で非難や反発の声が上がりました。しかし、紙幣の整理が順調に進むに従い民間事業は拡大し貿易も黒字化し、国内経済は次第に好転します。「松方デフレ」と呼ばれたこの政策は、やがては国内外から高く評価されることになりました。

日本近代化への貢献

内閣制度が発足した明治18年(1885)、松方は初代大蔵大臣に就任、以後、明治33年(1900)に第一線を退くまで、通算7代の内閣の大蔵大臣を務めました。明治24年(1891)と同29年(1896)に総理大臣になった際も二度とも蔵相を兼務しており、大蔵卿の時代を合わせると約18年にわたり、近代日本の財政金融制度の確立に貢献したことになります。特に第2次松方内閣の折には、急遽だった貨幣制度を銀本位制から金本位制に移行させ、これにより諸外国との貿易が対等にできるようになりました。引退後は元老として裏方にまわり、時の政府に適時助言を与えています。大正6年(1917)には内大臣に任命されますが、同11年(1922)、老齢により辞職。大正13年(1924)、89歳で生涯を終えます。その葬儀は国葬で営まれました。松方の墓の隣には最愛の伴侶だった妻満子さんの墓があります。

参考文献「絹と武士」ハル・松方・ライシャワー著、「日本銀行を創った男」小説「松方正義」渡辺房男著(文芸春秋)

この情報誌「MYタウン赤坂青山」は、地域のいろいろな世代や職業の方々が参加・協力して、取材から編集までを行い、月1～2回の会議でアイデアを出し合いながら制作しています。平成27年度の編集委員の募集に向けて、編集委員の活動内容を紹介いたします。

4 レイアウトされたグラを確認します

原稿をプロの手に託し、文章や写真が完成物と同じように配置された「グラ」を見ながら、誤字脱字や取材内容を確認し、数回にわたって校正して、取材先に最終確認をとります。

5 最終的な校正を行います

事務局と編集委員の担当者が、全体を通して、内容確認、誤字脱字のチェックなどを行って、印刷所にデータを渡します。あとは印刷ができるのを待ちます。

6 いよいよ完成!

自分たちで企画し取材してまとめたものが、赤坂と青山の全戸に配布されます。

参加者募集

平成26年度 赤坂・青山地域交流会

赤坂地区総合支所では、地域で活躍されている方々の活動を紹介するとともに、地域内の団体相互の交流を深め、情報交換を行う場として「地域交流会」を開催しています。

今年度は、これまでに地域活動に参加できていなかった方々に地域に関心を持ってもらい、活動を始めようとするきっかけとなるように、一般的な労働退職者年齢を迎えた65歳、66歳の皆さまを招待し、記念式典を兼ねた交流会として実施します。

実際に地域で積極的に活動されている方々によるパネルディスカッションや、町会・自治会をはじめとする地域団体の活動を紹介するコーナーなどを通じて、地域のことを知ることができ貴重な機会です。皆さまのご参加をお待ちしております。

対象: どなたでも

日時: 平成27年3月21日(土曜・祝) 午後2時から午後3時30分まで

場所: 赤坂区民センター 区民ホール (港区赤坂4-18-13)

事前のお申込みは不要です。直接会場にお越しください。

●お問い合わせ／赤坂地区総合支所 協働推進課 協働推進係

電話: 03-5413-7272

編集委員って

どんなことをするの?

1 はじめに特集のテーマを考えます

編集や取材など経験のない初心者から経験者まで10数名の赤坂・青山の地域の方々編集委員として集まり、特集テーマについて話し合います。赤坂・青山ならではのテーマを議論し、各記事の担当を決めます。

2 テーマに沿って取材を行います

決められたテーマに沿って、編集委員が取材先に連絡し実際に足を運んで話をうかがいます。写真の撮影を行う場合もあります。取材に行ってみると興味深い話が聞けるときもあります。

3 紙面に載せる原稿をまとめて提出します

取材した皆さんの情報の中からテーマにあうように文章をまとめます。伝えたいことを文字に表現し、決まった文字数で書くことは簡単ではありませんが、委員や事務局と相談しながら進めていきます。原稿は締切日までに事務局に提出し、確認作業を行います。

4 レイアウトされたグラを確認します

原稿をプロの手に託し、文章や写真が完成物と同じように配置された「グラ」を見ながら、誤字脱字や取材内容を確認し、数回にわたって校正して、取材先に最終確認をとります。

5 最終的な校正を行います

事務局と編集委員の担当者が、全体を通して、内容確認、誤字脱字のチェックなどを行って、印刷所にデータを渡します。あとは印刷ができるのを待ちます。

6 いよいよ完成!

自分たちで企画し取材してまとめたものが、赤坂と青山の全戸に配布されます。

編集後記

編集委員自らが地域の魅力を発信する地域情報誌「MYタウン赤坂青山」。今年度も最終号を迎えました。1年間の活動を振り返ってひとこと。

●有田 / 今年で2年目の編集委員。地域との関わりをさらに深めることができました。これからも、港区の発展のためにお役に立てればと思っています。●井上 / 同街に住む色々な世代や職業の人たちが、取材から編集までアイデアを出し合い発行する情報誌に魅力を感じます。●上原 / 予想していた以上に、本格的な活動で、色々勉強させていただきました。事務局の皆様のかき添えサポートがあり、地域のことをより深く知ることができました。●小野 / 普段会えない人に会い、行かない場所に行き、取材や撮影をして原稿を書く…という、貴重な経験ができました。地域をより身近に感じられた1年になりました。●菅谷 / 編集を、楽しんで取り組んだ1年でした。新鮮な体験ができたことに感謝しています。お読みいただいた読者の皆様、スタッフの皆様へ感謝! ありがとうございます。●中島 / 赤坂青山の足元の歴史と文化に興味があり参加しました。知らないことだらけの再確認は嬉しい悲鳴でもあります! 古きを訪ね、新しきを知るが、今必要と痛感です。●中村 / 2年間携わってみて、今まで知らなかった赤坂、青山が少しずつ見えてきました。好奇心と期待をもって、次年度に臨みたいと考えています。●蓮井 / マイタウンの編集に参加させていただいたおかげで今までより青山赤坂のことを知ることが出来て良かったです。もっと地域と積極的に関わっていきたいと思いました。●中山 / 編集委員3年目になりました。今年度も夏前から業務が忙しくあまり参加できませんでしたが、ポイントでは、なんとアカサポにいられたかなと思っています。●山中 / 1年間、お世話になりました。赤坂協働推進課の方々が大変親切に教えて下さり、楽しく編集に携わることができました。また、赤坂、青山地区に住む、なかなか知り合うことがない年代の方々に会えて、貴重な体験が出来ました。皆さま、ありがとうございます。

赤坂地区総合支所からのお知らせ

タウンミーティング

メンバー募集

応募期間

3月31日(火)まで!

「未来に向け共存できるまち赤坂・青山」魅力あふれる国際都市へ～」の実現に向けて、赤坂地区では、区民協働による赤坂・青山のまちづくりを目指して、一緒に考え、行動する区民参画組織「赤坂青山地区タウンミーティング」を設置しています。平成27年度は3つの分科会メンバーを募集します。

●対象者: 赤坂青山地区に在住、在勤、在学者、または、赤坂青山地区のために活動したい人。

●募集する分科会:

①地域情報の発信・交流分科会……赤坂・青山の魅力を編集委員自ら取材・編集し、地域情報誌「MYタウン赤坂青山」を発行します。身近で魅力ある情報の発信を目指します。活動内容はこちらに

②いきがいつり推進分科会……地域の高齢者の交流の場である「赤坂・青山ふれあいサロン」を運営します。

③地域の魅力発見分科会……地区の魅力を地区内外に広く発信し、まちのにぎわいを創出するため、地域の新たな魅力発掘や情報発信の手法などについて検討します。

●活動期間: 平成27年4月～平成28年3月

●人数: 各分科会ともに15名程度

●お申し込み: 住所、氏名、電話番号(連絡先)、在住・在学・在勤などの別、希望分科会を書いて、郵送、持参またはファックスで3月31日(火)までにお申し込みください。

●お問い合わせ・お申し込み／〒107-8516 港区赤坂4-18-13 赤坂地区総合支所 協働推進課 地区政策担当

電話: 03-5413-7013 FAX: 03-5413-2019

港区暮らしのガイド2014の訂正について

平成26年11月に発行した、「港区暮らしのガイド2014」の掲載記事に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。皆さまにはご迷惑をおかけし、大変申し訳ありません。

対象記事:

(1)子育てカレンダー(P56・57)

(2)手話通訳・要約筆記の派遣(P119)

詳しくは区ホームページをご覧ください。

http://www.city.minato.tokyo.jp

●お問い合わせ／区長室広報係

電話: 03-3578-2036

赤坂青山地域情報誌 第31号

平成27年(2015)3月発行

編集: 港区赤坂・青山地区タウンミーティング

地域情報の発信・交流分科会

発行: 港区赤坂地区総合支所協働推進課

〒107-8516 港区赤坂4-18-13

電話: 03-5413-7013

FAX: 03-5413-2019 (発行部数 23,000部)

「MYタウン赤坂青山」は、地域の人々が自ら企画・取材し、編集する地域情報誌です。赤坂青山の身近で魅力あふれる情報の発信を目指します。

「七重八重 花は咲けども 山吹の 実の一つだに なきぞ悲しき」

雨の日、侍(太田道灌)に蓑笠を乞われた貧しい少女は、実の成らない山吹の花一輪を差し出しました。蓑を貸すことができない貧しさを詫げる想いを、山吹のひと枝を差し出して、八重の山吹には、実の(蓑)一つ成らないことを古歌に掛けて伝えたのです。後からその古歌(後拾遺和歌集)の意味を知った道灌は、少女の奥ゆかしい心根に感動し、精進して後に立派な歌人になりました。

「おもてなし」—2020年東京オリンピック・パラリンピック決定のニュースで世界の注目を集めたこの言葉は、遙か遠い昔から、日本人が客への心映えとして大事にしてきたものでした。

古くから芸者文化が息つき、各国からの来訪者が多い赤坂・青山においても大変重要な意味をもつ言葉でもあります。

今回は、歴史・文化的な視点から、この地域に根付く「おもてなしのこころ」を紐解いてみようと思います。

格式あるお座敷で歌舞音曲や宴の要におられる芸者のお仕事は、長い研鑽の賜物だと思います。磨かれた芸の習得など、口に尽くせないご苦労があると思います。赤坂芸者の育子姐さんと真希姐さんのお二人にお話をうかがいました。

❖ 育子姐さん 「いらっしゃいませ」と出迎え、「こんばんは」と入ってこれたお客様の様子を感じ取るのが芸者です。お客様の機嫌がいいとか怒っているとかを感じ取り、楽しんでもらえるように場を和ませます。宴の雰囲気が悪いと思ったら、それを取りなすのも芸者の仕事です。お客様が帰るときに、「ありがとう、楽しかった」と言ってもらえるよう心の中で格闘するのがおもしろいです。今は、歴史・文化的な視点から、この地域に根付く「おもてなしのこころ」を紐解いてみようと思います。

—踊りやお花など、芸者さんに必須のお稽古はありますか？

❖ 育子姐さん 私が熊本で芸者として、仕込みっ子から始めたのが昭和39年です。その間、掃除、お姐さんの足袋の洗濯を、怒られながらしていました。その合間にお稽古をしていました。地方にある「仕込み」という独特な制度の期間が東京にはなく、半玉*から芸者ですから、地方のほうが厳しいです。ですから、若い人には厳しく接しています。特に心掛けているのは、全員で集まってご飯を食べることです。そこで、お互いの食事の作法やいろいろなしぐさを確認し合い、必ず言うことばもあります。あらゆることが、すべての芸に通じていくと考えています。

—赤坂芸者になったきっかけ、また赤坂を選んだ理由は？

❖ 真希姐さん 私は仙台の出身で、芸者になるにあたり、東京のいろいろな花柳界に出向き話を聞きました。赤坂では、先輩に「私は芸者の仕事に誇りを持っている。芸者は、親に言えないような職業ではない。もし芸者になりたいのなら、両親を連れてきなさい」と言われ、即決しました。

—芸者さんになる前の印象と、実際になってからの印象の違いは？

❖ 真希姐さん 芸者になってよかったと思っています。ただ、花

*半玉(はんぎょく)—芸者見習いのこと。名前の由来は玉代(芸者さんをお座敷に呼ぶための料金)が半人前で芸者の半分なので半玉。修行を経て一人前のお座敷仕事ができる芸者と呼ばれます。関西は「芸妓」の見習いを「舞妓」、関東は「芸者」の見習いを「半玉」と呼ぶ花柳界独特の名称です。

柳界に入る前は、優雅なイメージがありましたが、実際に入ってみると、全然違いました。住み込みで皆と一緒に生活していますが、気力と体力が必要で、この生活に慣れるまで7年ほどかかりました。

—赤坂の芸者としての心構えを教えてください。

❖ 真希姐さん 今、芸者として赤坂で働かせてもらっています。育子お姐さんの下で、迷惑にならないようにと考えながら働いていますが、その積み重ねが大事だと思います。自分が売れるようにするのではなく、赤坂のためにがんばるという気持ちで過ごすことを心掛けています。

—赤坂芸者ならではの特徴は何ですか？

❖ 育子姐さん 赤坂芸者は華やかでお嬢さんぽいのが特徴です。例えば、赤坂は牡丹、新橋は百合の花と言われ、着物の着付けも、座って帯が畳にちよっと付くくらい長めで、柳がゆれているような柳腰です。

❖ 真希姐さん 花柳界のパーティーでは、赤坂芸者が一番華やかですが、新橋のお姐さんに「帯が長い」といつも直されます(笑)。

—2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、花柳界を世界に発信するために何か準備をされていますか？

❖ 育子姐さん 昔は、1か所の花柳界でもよかったのですが、今は東京の花柳界が力を合わせて文化を守ることやらないと花柳界がなくなる…と東京都が企画して、「大江戸寄席と花街の踊り」を実施しました。落語と東京六花街*の踊り、提灯を照らし、芸者衆22人が踊った最後の踊りは、お客様の「ワー」という歓声で三味線の音がきこえないほどの反応がうれしく、今年もやらなきゃと思っています。オリンピック開催決定を契機に、世界の人たちに向けて、1日1か所でも六花街の踊りと芸者の文化を見せたいですから、発信できる場が必要です。

—オリンピック・パラリンピックでは、赤坂の街を人力車に乗った芸者さんと選手と一緒に練り歩いたり、TBS前の広場で日舞を披露していたなど、皆さんの前で姿を見せていただけたらうれしいです。

❖ 育子姐さん そうですね。赤坂に来て50年経ちますが、恩返しのためにも、街のイベントには常に協力して馳せ参じたいと思います。また、若い人にも芸者のことを発信していきたいと考えています。

●赤坂芸者さんのHP (東京赤坂組)
<http://akasakakai.jimdo.com/>

【告知】3月21日(土)・22日(日)の2日間、赤坂ACTシアターにて、第53回 赤坂をどりが開催されます。詳しくは、こちらを参照ください。

●チケットスペース
<http://www.ints.co.jp/akasaka2015/>

育子姐さん

*東京六花街—東京の新橋、赤坂、芳町、神楽坂、浅草、向島の花柳界のこと。

花柳界に生きた芸道五十五年 彰子姐さん (前・赤坂芸妓組合長)



真希姐さん

昭和32年、私のお披露目の頃は、神武景気や岩戸景気で、芸者衆400人余りの赤坂花柳界の全盛期です。通りは料亭と置屋が軒を連ね、自動車が行列をなす中を、芸者を乗せた人力車がすいっと走っていました。

芸事が好きな両親のもとで、6歳から踊りや長唄の稽古をしました。疎開先の富岡製糸工場の近くには花柳界があり、中村座という大きな回り舞台もありました。藤間流のお

師匠さんは、私にとって神様でした。人のお稽古を見ては覚え、国民学校4年の時は男役で刀を振り回し、電球は割らないでね……と、電球が貴重だった時代です。

戦後に財を成した父も母も、踊りの師匠になることには賛成してくれましたが、どうしても歌舞伎座で踊りたかった私は、赤坂芸者になれば歌舞伎座で踊れると聞き、父には内緒で22歳の時に赤坂に来たのが始まりです。

お座敷でお客様が、これ唄いたいと言ったら即興で踊る。何でも踊りました。どのようなお客様でも、ここなら絶対安心と思っていただけよう、すべては「秘すれば花」でした。これが花柳界の大切なことです。

歌舞伎座時代の踊りの先輩(OB)に「この世界の良いところを後輩にしっかりと伝えたい」と約束をして、赤坂芸妓組合長を6年間務めました。家を出る時、「必ず和をもって尊しとなす」「上に立ったら公平に」と毎日3回唱えてから出かけたものです。6歳で疫病にかかり、18歳までは生えられないと言われていたのに、その後5回の手術を乗り越えて79歳。

踊りの拍子をつかむのに、お囃子のお稽古にも励みしました。今年の「赤坂をどり」で、お囃子で賛助出演するつもりで体調を整えております。今も、「赤坂をどり」のプログラム作りや、若い人たちのおさらいを見たり、前に進んでいるつもりですが、反省の方が多い毎日ですね。

—紫陽花色の小紋と帯締めに、「これから打ち合わせなの」と黒い薄布を髪にまとい、軽やかに赤坂のホテルから小雨の中に立ち去る彰子姐さん。後ろ姿は一筋の芸道を歩んだ眩しさに輝いていました。

和菓子から知る“おもてなし” —とらや

みなさんは、客人のおもてなしに和菓子を利用されていますか？ 赤坂に本店を構える老舗和菓子店「とらや」に、和菓子を使っておもてなしをする際に知っておくと、おもてなしの心がさらに深まるお話をうかがいました。

和菓子は、果物や木の実、中国から伝わった唐菓子や点心、スペインやポルトガルから伝わったカステラなどの南蛮菓子の4つがルーツと言われています。1000年以上前に書かれた「源氏物語」には「つばきもち」と名前がついたお菓子が登場しています。

和菓子は「五感の芸術」と言われ、この五感を使うことで和菓子がより一層美味しく感じられるのです。ここでの五感とは、**見た目、味、香り、食感、そして菓銘**(菓子の名前)のことです。古典文学や四季の移ろいにちなんだ名前を耳で聞くことで、さまざまな情景が思い起こされ、和菓子の世界が広がります。

菓子作りの際にも様々な工夫がなされているそうです。例えば、「まんじゅう」の底の皮は薄くなっています。これは、蒸す際に熱通りを良くし、皮と餡にきちんと火が通るようにするための工夫です。最近では子どもたちが和菓子を食べる機会が少なくなっています。良質な材料にこだわるとらやでは、「和菓子をご家族で楽しんでいただきたい」との想いがあるそうです。

そして、外国の方にも日本文化の一端としての和菓子を紹介するため、35年前に、とらやパリの店を開きました。初めは珍しがられていたものの、今では、親子三代にわたって通う現地の常連のお客様もいるそうです。

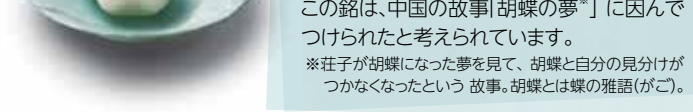
みなさんも、お客様をおもてなしするには、これらの知識を活かし、五感で楽しめるように、季節や物語を考えながら、和菓子をお出ししてはいかがでしょうか。



手折桜 (たおりざくら)
羊羹製 白餡入 (はかんせい しろうあん入り) 明治42年(1909)
「春を謳歌(おうか)するように咲く桜の美しさは、自分だけで賞美(しょうび)するには忍びなく、手で折って持ち帰りたい。」という気持ちは、桜を愛してやまない日本人の自然な感情であると思います。「手折桜」は日本人の桜への想いが込められたお菓子です。

遠桜 (とおざくら)
きんとん製 小倉餡入 (きんとんせい しょうあん入り) 昭和54年(1979)
花見といえば桜の下をそぞろ歩いたり、宴を開いたりしますが、野山に点々と咲く桜を眺めるのもまた風情があります。「遠桜」は遠くに見える桜の濃淡ある様を、白と紅のぼろで表現しました。昭和55年の宮中歌会始御題「桜」にちなみ考案。

春の夢 (はるのゆめ)
薯餅製 白小倉餡入 (しじょうせい しろうあん入り) 大正7年(1918)
「春の夢」は、白い蝶を象った薯餅顔顔です。この銘は、中国の故事「胡蝶の夢」に因んでつけられたと考えられています。
※壮子が胡蝶になった夢を見て、胡蝶と自分の見分けがつかなくなったという 故事。胡蝶とは蝶の雅語(ごご)。



ラスを続けていらっしゃいます。子どもたちには、おとなのお稽古意識とは違う豊かな感性や自由な創造力、すばらしい表現力があり、またこのクラスでは、年齢をこえてのコミュニケーションも生まれて、昨今のような地域交流の場が少ない子どもたちにとっては、放課後の貴重な場となっています。

一方、いけばながこれからもより多くの人々の関心を高め、発展していくためには、従来の「お稽古事」や「床の間の飾り物」などからまず脱却し、現代のさまざまな新しい空間を見据えた「いけばな」のあり方が必要と考え、実際にお客様の目の前で花をいけて見せる「デモンストレーション」を各地で開催されていらっしゃいます。

❖ 草月流が意識するおもてなしとは

「おもてなしとは、相手について考えること」と茜さんはおっしゃいます。いけばなに限らず、お客様を迎えるときは、家であってもパーティーであっても、相手によってそのおもてなし方が変わります。2008年の洞爺湖サミットで、茜さんは会場の迎え花を担当されました。ディナーの後に、各国首脳夫人に対して、いけばなの

「おもてなしとは、相手について考えること」 いけばな「草月流」勅使河原 茜さん

1927年、勅使河原 蒼風により創流された「草月流」は、「いつでも、どこでも、だれにでも」をモットーとしています。その東京・赤坂の本部、青山通りに面した草月会館に、第四代家元の勅使河原 茜さんをお訪ねしました。

❖ これまでの活動

家元になられて14年目の茜さんは、幼稚園の先生の経験もあり、先代家元であった父上の宏氏の勧めもあって、およそ26年前より、3歳から18歳までを対象としたいけばなのジュニアクラスを続けていらっしゃいます。子どもたちには、おとなのお稽古意識とは違う豊かな感性や自由な創造力、すばらしい表現力があり、またこのクラスでは、年齢をこえてのコミュニケーションも生まれて、昨今のような地域交流の場が少ない子どもたちにとっては、放課後の貴重な場となっています。

❖ より多くの人に「いけばな」を知ってもらうために

いけばなの展覧会に来る方は、いけばな関係者が多く、一般の方がいけばなを目にする機会は多くありません。「いけばな」と言うと、難しく考える人が多いのも事実です。そんな堅いイメージを一新すべく、草月流では新たな活動を始めたそうです。あらゆる世代のより多くの人に関心を持ってもらえるようにと、他の流派に先駆けて、昨年プールのイメージキャラクター「いけるちゃん」を2013年11月に誕生させました。これには、海外も含めておよそ1500件の応募があったということで、少なくとも同数以上の関心を集めたことにもなります。「ただ、キャラクターを作るのではなく、これをきっかけに、いけばなに興味を持ってもらえたら」と茜さんはおっしゃいます。2年後の2017年は、草月流創流90周年にあたり、「いけるちゃん」のなお一層の活躍が期待されています。



❖ オリンピック開催にむけて、国内・海外にいけばなを伝えたい

2020年、東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、外国人来訪者が増え、和の文化への関心が高まっています。「いけばな界には多くの流派がありますので、草月流だけでは決まらませんが、空間などで、照明や音楽などを交えて、いけばなの

パフォーマンスが
できたらうれしい
です。 造形作品
として飾られる「いけばな」はあくまで「静」です。それに対して、「動」としてのパフォーマンスをすることで、その魅力をよりアピールできます。これまでも茜さんは、国内外で、20mを超える大きな舞台で、地域のひと協力してパフォーマンスを成功させたことがあります。

現在草月流は、国内のみならず、アメリカ、台湾、香港、ドイツをはじめ、海外におよそ120か所の支部やスタディーグループ(支部より小さい団体)があり、ハワイやインドなど50年以上続いている支部もあるそうです。現地の外国人が日本人を指導している国もあります。「外国の方には、和の文化にあこがれていけばなを学ぶ人と、純粋な植物のアートにとらえて楽しむ人、両方いらっしゃいます」と茜さん。

草月流本部では、外国人来訪者向けのプライベートデモ&レッスンも行っています。

❖ 勅使河原 茜さんより、読者に向けてのメッセージ

「ぜひ、身近なところに花をいけてみてください。たとえ一輪の花をグラスにいけるだけでも、その場の雰囲気が変わります。家族や周りの人に花を感じてもらうことで、会話が生まれ、心にゆとりをもてるのです」

—草月流の象徴でもある“竹”の如く、今後もしなやかに勢いよく発展が続くことを願っています。国内だけでなく世界中のひとりで多くの人たちに、花をいける喜び、楽しみ、そして優しさを感じてもらいたいですね。

外国人に聞か! 「OMOTENASHI」 おもてなし

日本のおもてなしについて

日本人は礼儀正しく、親切で優しい

想像をはるかに超えて、誰もが温かく迎えてくれる

お店のサービスが良い

無料でキレイにプレゼントをラッピングしてくれて、対応も素早い

赤坂・青山のまちについて

都会では時間の流れが速く、エキサイティング!

交通の便がよく、時間通りに電車やバスが来るのがすごい

青山のキラキラした雰囲気が好き。ダンスや音楽、パーティー等のイベントも楽しい

地下鉄の無料 Wi-fi は助かります。使える場所がもっと増えたらいいな

国際的なまちのために必要なこと

日本人の控えめで自己主張しないところは、外国人には理解しづらい。もっとはっきり気持ちを伝えてほしい

英語が伝わらない

スーパーで日本語が読めない食材がわからない

お寺や神社といった観光地での英語表記が不足している

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、地域ぐるみで国際的なまちづくりをすすめていきたいですね。